

それほど小さなものはみあたらない。オオヒナノウスツボと最も異なる点は萼裂片が細長く披針形鋭尖頭であることである。この性質は朝鮮北部の山地に分布する *S. koraiensis* Nakai に類似するが、花序が頂生する点で異つている。然し *S. koraiensis* にも花序の頂生する傾向をもつものがあり、區別は困難であるが、葉は質が厚く、基部は心臟形で、頂部はあまり尖らず、鋸齒が微少な点で區別される。ツシマヒナノウスツボはオオヒナノウスツボと *S. koraiensis* との中間的な形態をもつもので、いずれかの變種とすべきものと考えられるが、他の種類とのつりあい上、又特にどつちかの種類により近いということもないので分化の程度のごく弱い種類と考えてもよいものと思う。

本研究は本田先生の御指導になるものであり、又種々御援助下さつた原博士、外山三郎氏、標本の研究を許された科学博物館の方々に深謝します。

○久内氏の“シーエル・タロンとは何か”の補遺(石川元助)

Motosuke ISHIKAWA: Japanese name of *Solanum mammosum* L.

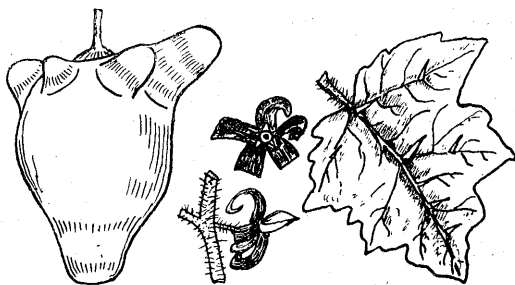
シーエル・タロン即ち *Solanum mammosum* L. に就いて久内清孝氏は植研第 21 巻第 3~4 號 24~25 頁で“當時仲間の話題になつた事があつたが、其正體は容易に分らなかつた”と述べられ、次いで L. Bruggemann の記事を引用して説明して居られる。當時私は Bismarck 群島の New Britain 島にあつて現地植物の研究に従事していたが、たまたま昭和 20 年 7 月 3 日

Rabaul から 60 km ばかり離れた Vukawa と言ふニューギニア土人部落の菜園でこれを採集したので、當時のノートを参考にして若干補遺をして置きたい。

本品は Qunantuna 語で Gigin と稱し、野生はない。ドイツ人が將來し、イギリス人は食

用にしてゐたと土民は語つたが彼等自身食用にしてゐない。私も遂にこれを食用化し得なかつた。尙本品はチチナス(乳なす)と新稱されラバウル周邊に於てはあまねく行はれていた。

B 氏の記載では“軟毛に被はれ、餘り長生きせざる灌木”とあるが軟毛と言ふよりもむしろ剛毛に近い粗毛で被はれ、灌木狀を呈する木本である。草高 1.5 米内外、葉は不整裂葉、長徑、葉幅共に 13 cm 内外、葉脈上の處々に長さ 6~7 mm 透明銳利な刺がある。“花は 2 個づつ出る”とあるが必ずしもそうではない。花徑 2 cm、花色は濃紫色、花は五瓣裂し先端を外方に卷く。“果實は赤黃色洋梨型、基部の周邊に 3 個の乳頭狀の附屬物を備ふ”とあるが果實は未熟時は淡綠色、次第に黃色を増し遂に鮮黃色とな



る。倒立洋梨型である。基部の周邊には 3-5 個の乳頭状凸起がある。本品をチチナス(乳なす)と新稱するに致つたのはこの形状に起因する。其後佐藤正己博士の示教により三木末武氏著南方農業紀行(昭和 19 年)にアート刷圖版があり既にキツネナスの和名が與へられていることを知つた。

○伊豆天南星について (倉田 悟) Satoru KURATA: On *Arisaema izuense* Nakai.

イズテンナンショウは伊豆南方の一碧湖畔にて岸田松若氏により發見されたもので、其後他處に産するの報を聞かぬが、杉本順一氏は既に古く下田及び天城産を報じて居られる(植物界 1-1: 4)。賀茂郡南中村所在の東京大學樹藝研究所附近にも極く普通に見られ、四・五月ともなれば、附近の高所に生育するホソバテンナンショウの瘦軀に對比して、それより下方に本種が丈の低い割に巨大な濃紫花を葉隠れに開いて居る。又、仁科村大城峠より掘り來つた天南星が東京で開花したが、これも伊豆天南星であつた。かくしてこの天南星は南伊豆には廣く産すると思われる。

本種は偽莖稍々短かく(10-30 cm)、花梗超出部も短かい(3.5-8 cm) 點が良い特徴で、花序附屬物の頭部は著しく膨大する事多きも、細いものでは巾 1 cm 前後である。小葉縁は普通全縁であるが鋸齒を有する個體もある。又、通常は一葉のみ發達するが、屢々二葉を出し、こうなると杉本氏が比較されし如くオオマムシグサに似たものとなり、小葉数の多き事(9 枚以上)、球根に珠芽を生ぜぬ點等により、ヒロハ天南星、蘆生天南星の群よりもオオマムシグサの群に入る事が分る。しかし別に伊豆にも天城山の一部にヒロハ天南星群のヒメ天南星に近縁な一種が自生する事は注目すべきである。

○ギンサカズキとは (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: Japanese name of *Nierenbergia rivularis*.

夏から秋にかけてさく外來の小草でギンサカズキという草のあることを教えられた、これは東京でのことである。小さなナス科の觀賞植物で、莖は地上を横にはい杓子狀の葉を出し、ところどころから、花筒の細ながくのびた徑 2 cm 位の白花がさく。その狀洋食の折に出る腰高のコップの様である。その偽英名は White cup という。南米アルゼンチン原産で *Nierenbergia rivularis* Miers といわれている。この草に英名に因んだかどうか知らないがギンバイソウ(銀杯草)という名がいつのころからか出來た。それが恐らく漢字名でつたわつて行く内に趣味の高い人が訓よみにしたものと思われる。石井勇義氏の園藝大辭典やその他のその道の本にはいずれもギンバイソウとしてある。どちらが雅名であるかは別として、名稱は一本にして貰わないと迷わくを人に及ぼすことになる。序ながら寺崎留吉氏はこれに同屬のアマモドキの學名と和名とで圖説し、ギンバイソウを別名としているが、これは故人がうつかり書き誤つたものである。地下の同氏、もつていかんとなす。